

工藝美術誌

1986

染織春秋

1

No. 180



藍染古布裂織

その魅力と
新しい試み

公文知洋子

元来裂織は布の再利用として生まれたもので、従ってどうしても再製品の観念が強く、「野良若」のイメージから脱しにくく、今日の生活からかけ離れたものが多いように見受けられます。

私は、この藍染古布を裂いて織り上げた時の、微妙に異なる藍の色の複雑で深味のある美しさに出合った時、織素材のひとつとしてその美しさを今日に活かせないものか、又もつと広範囲に利用することはできないものかと試行錯誤を重ねてきました。

裂織は、織に携わる者にとって身近な素材として親しみ易く、大抵の人が衣類等を裂いて一度は試みる織のひとつです。私も例外ではなく何点か織ってみました。しかし面白いのだけでも、色合い、風合い等もうひとつ魅力を感じることができなかつた。それが藍染古布との出会いとなつたのです。機にかけ織ってみますと、今までの新しい布の時には見られなかつた藍染古布だからこ

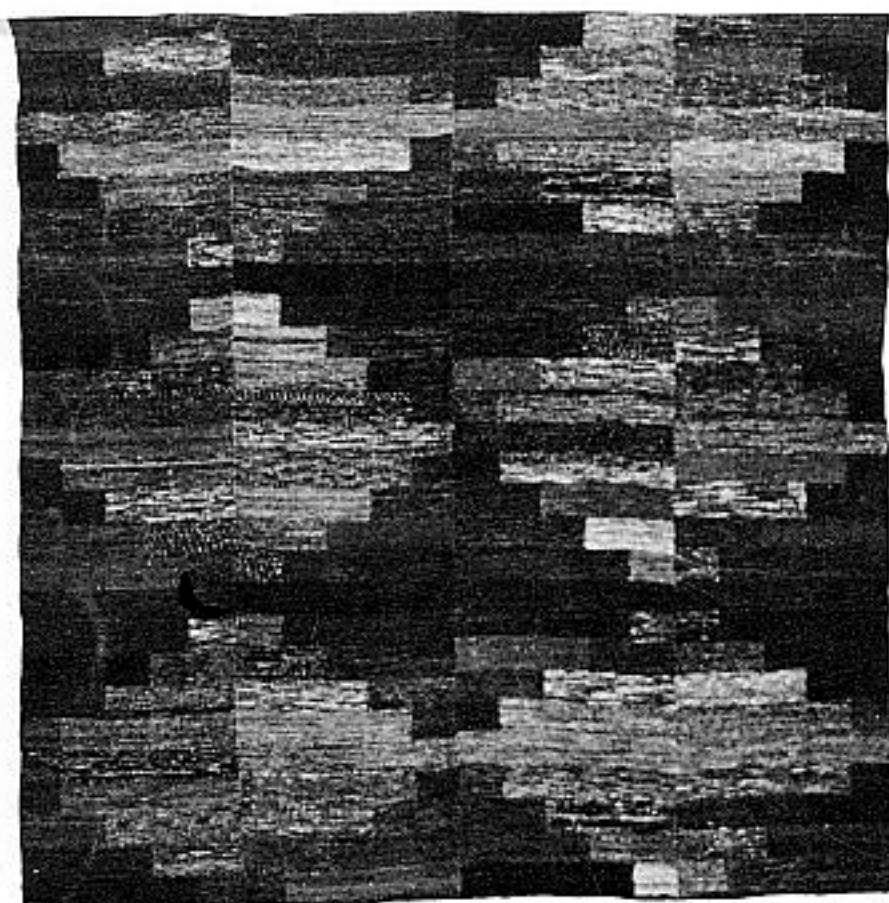
その深味のある色、風合い、光の角度によって微妙に変化する美しさ、それらが一体となって醸し出してくれる暖かい雰囲気、心を引きつけられ、古布が手に入る今、やっておかなければという気持ちも手伝って創作活動に入っていました。

藍染古布裂織の美しさは、手で裂かれたその断面からもうひとつの色が生まれ、裂くことによって生じたささくれた裂糸の端の陰影とが織り重なり、今までには見られなかつた色調が生まれ、深味のある藍の世界を醸し出してくれる点でしょう。その雰囲気大切にしていきたい。使い古されて

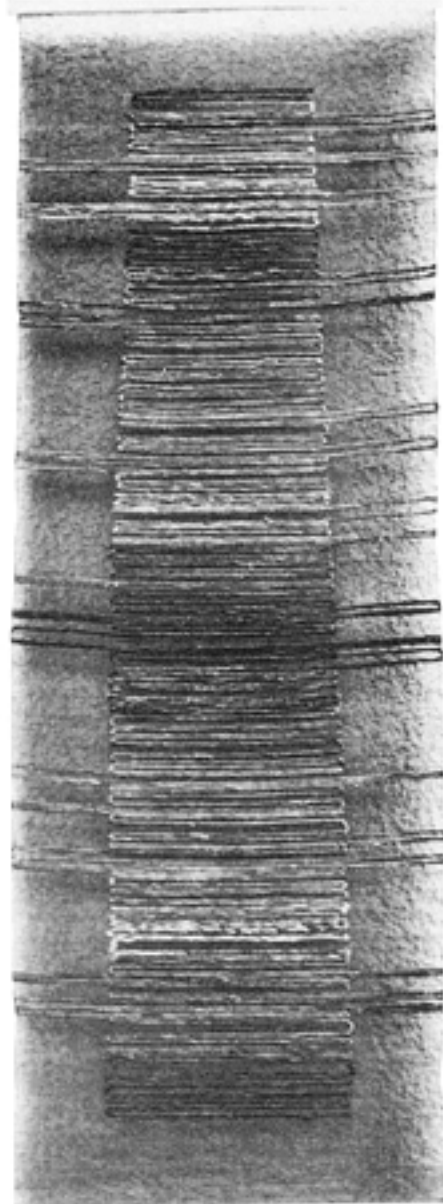
色褪せヨレヨレになった布ほど味わいのある裂織布に生まれ変わる。その不思議さ、楽しさ——裂織の魅力はここに

あるのかも知れません。使い古された布ほど味わいのあるものができ上がるのですが、それだけ裂く手間は大変になってきます。

裂織の最初の仕事は、洗濯をし、当て布を取り除き、縫糸をほどこくことから始まりですが、その丁寧な仕事ぶりに



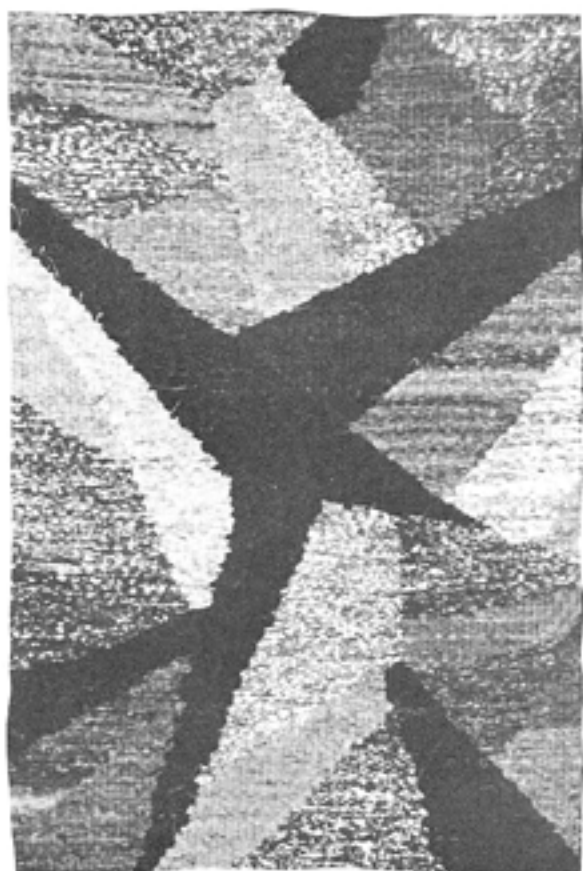
タペストリー「深」



裂



タペストリー

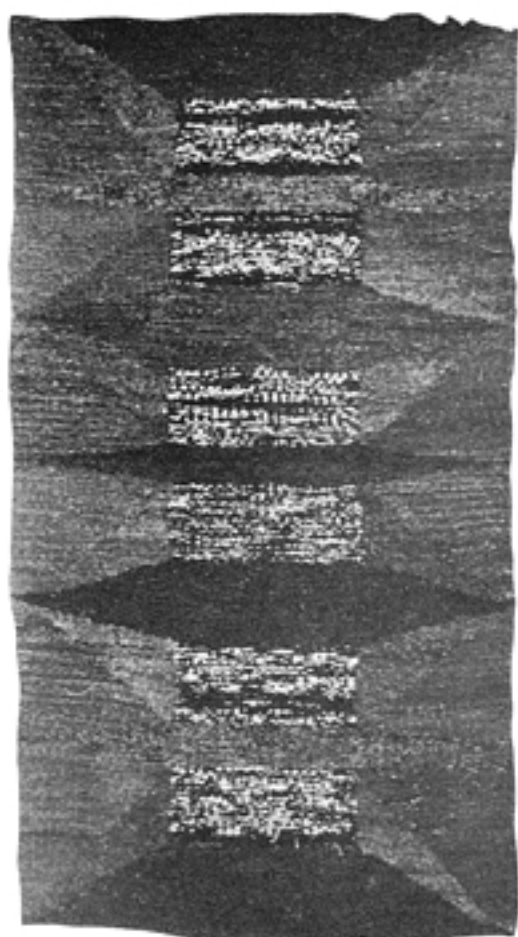


出合う度に先人達の布を大切にしたい心が偲ばれ、最後の奉仕となる古布達にもう一度生命を与える自分が幸せであり、もう一度美しさを表現する可能性を追求してゆく面白さに魅せられています。

また、藍染は膚を保護することでも知られています。糸をも保護していることを実感しました。というのも、布を裂いていて白地や地の色の部分は布が弱っていても藍の部分だけはしっかりしているのです。ここでも藍の素晴らしさ、不思議さに触れることができました。

単に布を裂くといっても、裂く方向、幅等裂き方によっても織り上がった時の表情は変わってきますので、おおよそのイメージに合わせて裂き方を決めていきます。柄布を裂いた裂糸は、普通の糸とは異なりすでに計算外の柄糸となっており、偶然性にまかす部分が多い。又、無地布も古布のため、織った場合かなり色合いが違ってきます。そのため、各々の裂糸を見てどのような色、柄、雰囲気になりますかとおおよその見当をつけなければなりません。又、経糸の色、種類、密度でもかなり雰囲気異なったものができ上がってきます。そういったことを頭に入れた上で構想を練り、それらに近い色合いの裂糸を幾つか取り出して並べ、糸量（これが結構重要）とにらみながら最終的なデザインと色を決定します。何しろ染めることのできない糸なので必要量を揃えるのが大変です。糸量によって

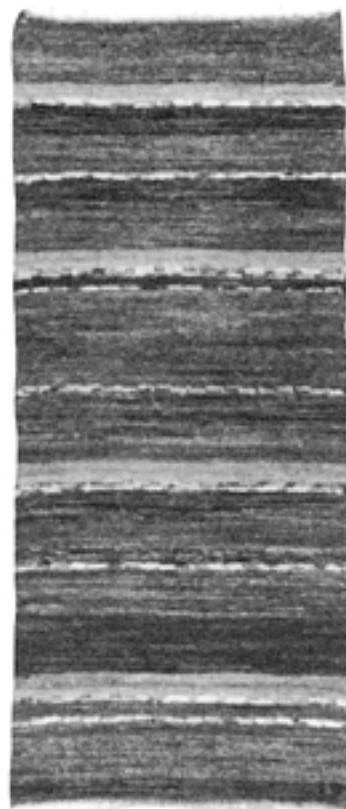
タペストリー



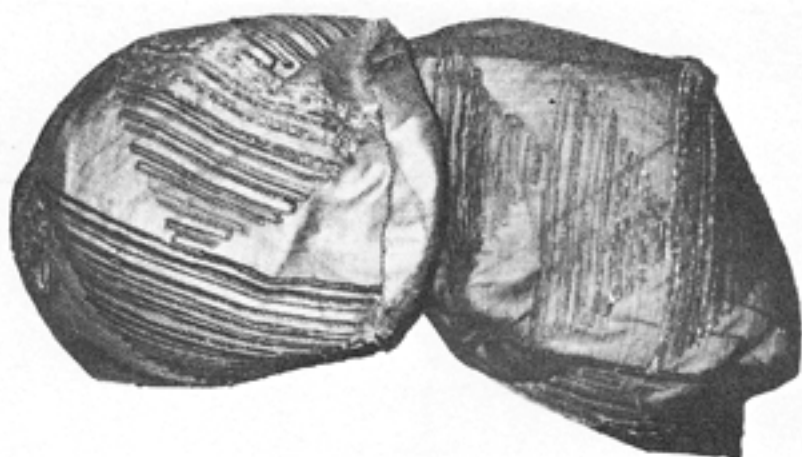
マント



センター

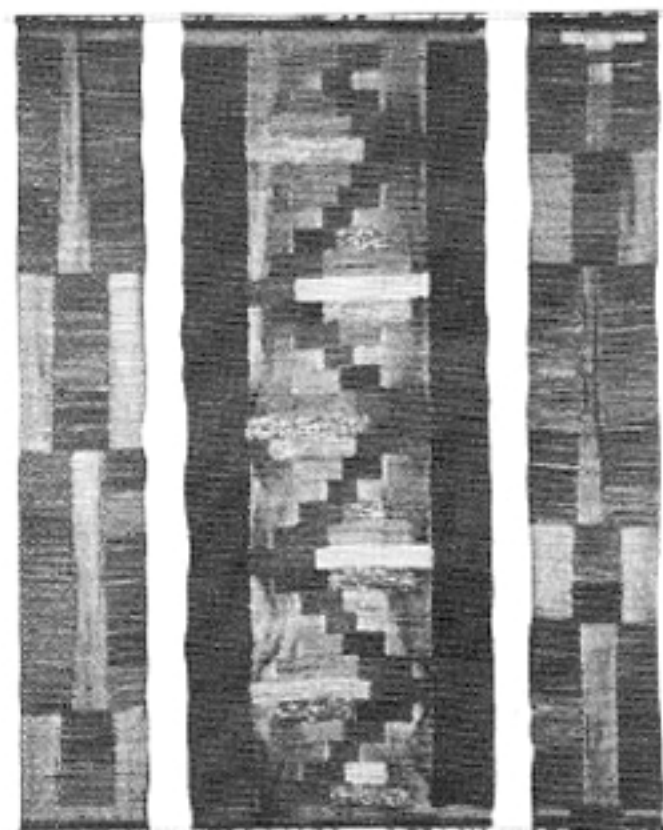


クッション



はデザイン変更が起つてきます。織り進んでいく途中でも、糸の玉の中より異なった色調のものが出てきますと（使い古された布なのでよくあります）また変更。常に流動的です。大変ですが反面とても面白い。でき上がって広げてみないと出来映えが判らないというのも楽しみです。

何点かのタペストリーを織ってみて制作途中いろいろ悩まされましたが、その都度新しい発見もあり、工夫も生まれました。センター、バッグ地等小物をいろいろ試みているうちに、裂糸との間に何段かの綿糸を入れることを思いつきました。緯糸に使う綿糸の種類、密度、色を変えることによって、それぞれ表情の異なった裂織布が生まれ、今まで思いもつかなかった利用面も広がっていきました。今までの裂織布は固くて大変重く、然すと用途も限定されてきたと思います。しかし、緯糸の糸遣いの工夫によって軽い裂織布ができ上がり、又、ギャザーを寄せることも可能となり、バッグ類の形態に変化のあるものや、マフラー、服地等も表現できるようになりました。更に、経・緯糸を粗くすることで裂織での透し布が誕生し、この利用面として、ケースメント、クッション等インテリア用品への夢も広がりました。これらの美しさ、面白さを知ってもらうためにも、今日の生活の中で十分対応できるものを創ってゆくことが大切だと思います。糸遣いや織の技法を工夫することによって、もっと



ケースメント

いろいろな裂織布が生まれ利用面も広がってゆくことでしよう。制作する度に新しい発見があり、とても楽しいものです。

織経験の中から自己表現の素材として、藍染古布裂糸に出合えたことは大変嬉しい。織り始めると、裂糸たちは私の手中より抜け出し、私の考えも及ばない世界を創り出してくれます。

。良い素材は、それだけで作品になる。

まさに素材に助けられての連続ですが、この藍の美しさをどこまで深く、美しく表現できるものか、今後も取り組んでいきたいと思えます。

(染織家)

本誌の編集内容につきまして
ご意見・ご希望をお聞かせ頂きます様
編集部一同、お待ちしております

誌格

平安遷都以来、千年余にわたり、京都は日本の政治・経済・文化の中心地でありましたが、今日も染織や陶磁をはじめとする伝統工芸の世界においては、依然として確固たる地位を担っております。

本誌は昭和三十八年の創刊以来、このような地の利を得て、各界により四季それぞれに開催される展覧会作品の動向を取材して、常にその流行の先駆を示し、また新たな流れを切り開かんとする新人作家の紹介を心がけ、広く美術工芸界全般への視野を養うことに意を用い、年代の記録を遺さんとするものであります。

予約購読

本誌の予約購読をご希望の場合は、書店または当社へお申し込みください。配本いたします。

なお、地方からの直接当社へのお申し込みは前金いただきます。直ちに二送本いたします。

前金誌代(送料別)

- 一部 二、七五〇円
- 十部 二五、〇〇〇円

ただし海外の送料は別途申しあげます。

月刊「染織春秋」

4180 昭和61年1月1日 発行

定価 2,500 円250

兼行 近 藤 知 嘉



発行所

美術出版

八宝堂

株式会社

京都府下京区船場町通政小路上ル
04(075)351-5221/04(075)351-1233